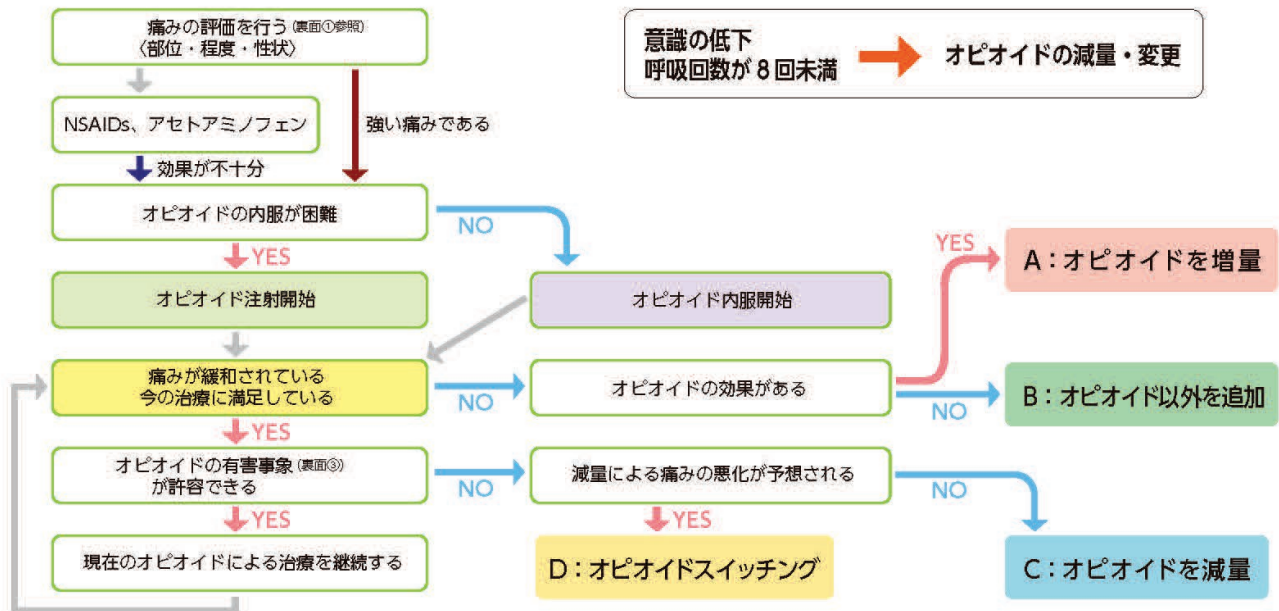


がん疼痛治療アルゴリズム (オピオイド使用開始の手引き)

痛みの部位・程度・性状の評価を
毎回確認すること

厚生労働省科学研究補助金（がん対策推進総合研究事業）
がん関連苦痛症状の体系的治療の開発と実践および
専門的がん疼痛治療の地域連携体制モデル構築に関する研究

がん疼痛の体系的治療実践に関する研究小班 作成
第1版（2024年7月作成）



- A オピオイドを増量する**
経口モルヒネ換算 ②換算表参照
30mg/日以下：50-100%増量
30mg/日以上：20-50%増量
高齢者・全身状態不良：20-30%増量
さらに増量する時は1日以上経ってから増量
- B オピオイド以外を追加する**
・鎮痛補助薬を追加する（右図を参照）
・緩和的放射線治療の適応について相談
- C オピオイドを減量する**
・通常：20-50%減量
・有害事象が重度もしくはは全身状態不良：30-50%減量
- D オピオイドスイッチングを行う**
・各種オピオイドの特徴について裏面⑥参照し薬剤を決定
・投与量はオピオイド換算表裏面②を参照
・スイッチングのタイミングは裏面⑤を参照

！ アルゴリズムを使用しても重篤な症状（痛みや副作用）が持続する場合は緩和ケア部門に相談

鎮痛補助薬の適応

薬品名	コルチコステロイド	ミロガパリン プレガパリン
適応	神経障害性疼痛に有効 注）がんの神経障害性疼痛は侵害受容性疼痛との混合痛が多い オピオイド投与で鎮痛が不十分もしくはオピオイドが増量できない際使用する	
特徴	強い抗炎症効果を発揮 腫瘍の脊髄圧迫による感覚・運動障害や 転移性脳腫瘍などによる頭蓋内圧亢進症状に有効	薬物相互作用が少ない 腎機能低下時は用量調整が必要
副作用	不眠・せん妄・高血糖・消化性潰瘍 易感染性・骨粗鬆症	眠気・めまい・せん妄・浮腫
処方例	内服 デキサメタゾン 1-4mg 1回1錠1日1回 1週間内服し効果がなければ中止 効果があれば1週間継続 以降半量ずつ漸減	ミロガパリン 1回5mg 1日1-2回 内服 1週間以上あけて5-10mgずつ増量 最大1回15mg 1日2回まで増量可 腎機能障害時は減量
	注射 デキサメタゾン 3.3mg/日 1週間投与し効果がなければ中止 効果があれば1週間継続 以降内服に切り替え	プレガパリン 1回50mg 1日1-2回 内服 1週間以上あけて50-100mgずつ増量 最大1回300mg 1日2回まで増量可 腎機能障害時は減量

① 痛みの評価

分類	侵害受容性疼痛			神経障害性疼痛
	体性痛	内臓痛		
障害部位	皮膚や骨・関節、筋内など	消化管や、肝臓・腎臓など被膜をもつ臓器		神経叢や神経根、脊髄
痛みの特徴	「ズキズキと鋭い」局在明瞭な痛み	「絞られるような」局在が不明瞭な痛み		「電気が走るような」しびれ感を伴う痛み
例	骨転移に伴う骨破壊	被膜に接するような肝転移		腫瘍の神経根・神経叢浸潤による末梢神経障害
	筋膜炎や筋骨格の炎症	がん浸潤による食道・大腸など通過障害		脊椎転移の硬膜外浸潤、脊髄圧迫
処方例	NSAIDs、アセトアミノフェン、オピオイド	NSAIDs、アセトアミノフェン、オピオイド		オピオイド、鎮痛補助薬

② 換算表

種類	投与経路	10mg	20mg	40mg
オキシコドン	内服薬		10mg	20mg
	注射薬		15mg	30mg
ヒドロモルフォン	内服薬	2mg	4mg	6mg
	注射薬	0.4mg	0.6mg	0.8mg
フェンタニル	注射薬	~0.1mg	0.15mg	0.2mg
	フェンタニルクエン酸1日用テープ		0.5mg	1mg
モルヒネ	内服薬		20mg	30mg
	注射薬	~5mg	5~10mg	10~15mg
コデインリン酸塩	内服薬	60mg	90mg	120mg
トラマドール	内服薬	50mg	75mg	100mg

③ 副作用

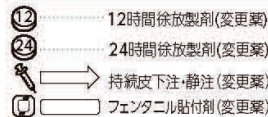
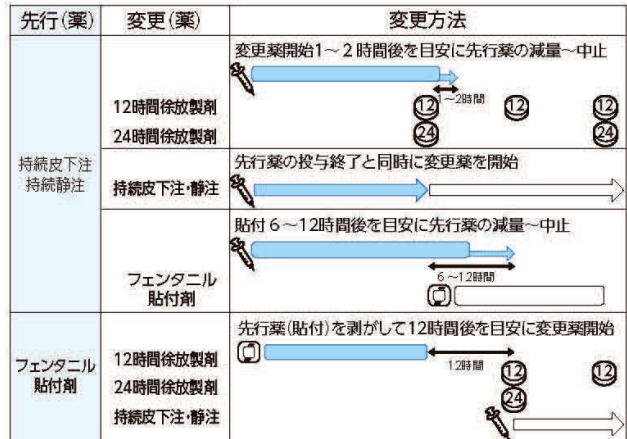
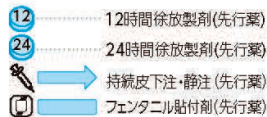
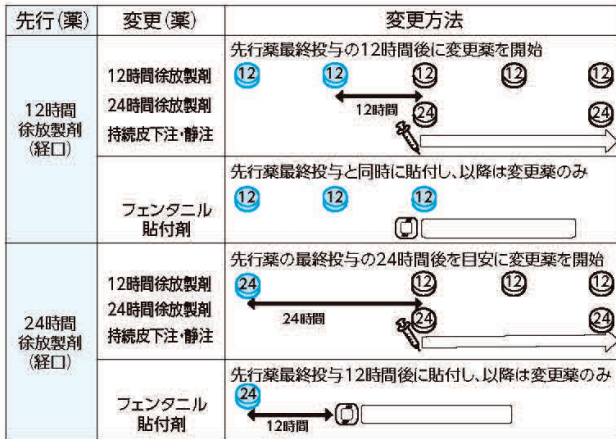
悪心嘔吐	投与開始後・増量後に30%の頻度で出現 3-7日程度で改善することが多い 症状が強ければ制吐剤併用で対応する
眠気	投与開始後・増量後に20-50%の頻度で出現 数日で軽快することが多い 改善が乏しければ減量やオピオイドスイッチングを検討
便秘	オピオイド投与患者でほぼ必発 便秘は耐性が形成されない 慢性便秘患者の場合は下剤を早期から使用する 末梢性μオピオイド受容体拮抗薬も適応となる
せん妄	投与開始初期や増量時に出現することが多い まずはオピオイド以外の原因を除外する 改善が乏しければ、オピオイドの減量やオピオイドスイッチングを行う

※制吐剤：ドパミン受容体拮抗薬（メトロプロラムド）や抗ヒスタミン薬（ジフェンヒドラミン）など
ただしドパミン受容体拮抗薬使用時は自律神経症状の出現に注意する。

④ 肝機能障害・腎機能障害時のオピオイド使用

肝機能障害時：20-50%減量して使用する
腎機能障害時：モルヒネは使用しない
オキシコドン・ヒドロモルフォンは減量投与
フェンタニルの増量は必須でない

⑤ オピオイドスイッチングのタイミング



⑥ 初期開始量

オキシコドン ・国内で最も使用頻度高い
・腎機能障害でも比較的安全

投与経路	初期開始量	レスキュー量
内服	徐放製剤1回5mg 1日2回	速放製剤2.5mg/回 1時間あけて
持続静脈注射	注射薬10mg/1mL 1A+生食47mL 1mL/時で開始 (5mg/日)	1時間量早送り 30分あけて
持続皮下注射	注射薬10mg/1mL 2A+生食8mL 0.1mL/時で開始 (4.8mg/日)	1時間量早送り 30分あけて

フェンタニル

・貼付剤は内服困難時にも使用できる
・消化器毒性が少ない
・腎機能障害でも安全に使用できる
・血中濃度安定に時間を要する

投与経路	初期開始量	レスキュー量
貼付	貼付剤0.5mg (6.25μ/時) 48-72時間は用量調整しない※ ※血中濃度安定に48-72時間要するため	モルヒネ・オキシコドン・ ヒドロモルフォンの速放製剤
持続静脈注射	注射薬0.1mg/2mL 2A+生食44mL 1mL/時で開始 (0.1mg/日)	1時間量早送り 30分あけて
持続皮下注射	注射薬0.1mg/2mL 2A+生食6mL 0.2mL/時で開始 (0.096mg/日)	1時間量早送り 30分あけて

ヒドロモルフォン ・1日1回から少量投与が可能
・他の薬との相互作用を受けにくい
・腎機能障害でも比較的安全

投与経路	初期開始量	レスキュー量
内服	徐放製剤1回4mg 1日1回	速放製剤1mg/回 1時間あけて
持続静脈注射	注射薬2mg/1mL 1A+生食47mL 0.5mL/時で開始 (0.5mg/日)	1時間量早送り 30分あけて
持続皮下注射	注射薬2mg/1mL 1A+生食9mL 0.1mL/時で開始 (0.48mg/日)	1時間量早送り 30分あけて

モルヒネ

・経口/注射/座薬がある
・腎機能障害時は代謝産物蓄積のため有害象が起りやすい

投与経路	初期開始量	レスキュー量
内服	徐放製剤1回10mg 1日2回	速放製剤5mg/回 1時間あけて
持続静脈注射	注射薬10mg/1mL 1A+生食47mL 1mL/時で開始 (5mg/日)	1時間量早送り 30分あけて
持続皮下注射	注射薬10mg/1mL 2A+生食8mL 0.1mL/時で開始 (4.8mg/日)	1時間量早送り 30分あけて